

図書館だより

1989. 7

村井 紀 (国文学科・助教授)

『文字の抑圧』

— 国学イデオロギーの成立 —

青弓社 1989. 5. 31

請求記号 121. 2/Mu41

国学は「文字」への蔑視によって自己を確立し、「文字」への抵抗を通してその体系を形成した。

(本文より)



目次

| | | |
|-----------------------|-------|---|
| 随想 | | |
| 読書ということ 酒井英行 | ----- | 2 |
| 「いき」とSprezzatura 平松哲司 | ----- | 3 |
| 卒業論文作成のために | | |
| 卒業論文 雑感 伊藤義生 | ----- | 4 |
| 卒論遁走曲 丸山隆司 | ----- | 5 |
| 本学教員の新刊紹介 | | |
| 村井紀『文字の抑圧』 | ----- | 1 |
| 藪禎子『小説の中の女たち』 | ----- | 6 |
| 図書館実習を終えて | | |
| 北井 和, 田仲ひとみ | ----- | 7 |
| 藤に咲く花 13 ハクサンシャクナゲ | ----- | 8 |
| お知らせ | ----- | 8 |

読書ということ

酒井英行（国文学科・助教授）

<趣味は読書です>という学生にしばしば出会う。そんな時、私は返す言葉が見付からず、当惑してしまうのである。

私の<趣味>は野球である。藤に来てからは、プレーすることはなくなったが、観ることは相変わらず好きである。私を魅了した選手は、長島茂雄であり、江川卓であった。（江川を過去形で語らねばならないのは淋しい。）彼らのプレーは、私の胸を熱くした。しかし、野球を観ることは、私にとって、<趣味>でしかなかった。野球は、私の深奥に働き掛け、私という人間を創り変えるものではなかったからである。

<読書>、特に若い時の<読書>は、単なる<趣味>であってはならない。無防備に自己を書物に委ね、心の扉を全開にして書物と向き合う体験こそ、若い時の<読書>であるべきだと思う。自分という存在は、決して、既定の固定的なものではない。「人間はみずからつくるところのもの以外の何ものでもない」(サルトル)のである。白いキャンパスの上に油絵具を塗り続けて、絵模様を変えてゆく。そういう作業が生きていることである。書物との出会いによって、精神を根底的に揺すぶられ、自己変革を遂げてゆく。そのような<読書>をしてほしい。

読み終えた本は、その時、既に、自己の一部となっているのである。そういう本を手放すのは、自己の一部を喪失するようなものである。したがって、書物は、基本的に、買って読み、手元に置いておくものである。読み返してみたい時、すぐに手に取れる状態にしておくべきである。蔵書趣味などというものではないのである。

自分のお金、自己犠牲を払ったお金で買うのがよい。自己犠牲は大きければ大きいほどよい。その欠損感が、書物からの吸収欲の原動力とな

るのである。私は、学生時代に、親からの少額の仕送りで下宿していたのであるが、部屋代は決っているので、買いたい本を買うには、食費を削る他なかった。夕方、大学の食堂まで行って、夕食として、鏝一切れだけの一番安い定食を食べたこともあった。これはまだよいほうである。インスタント・ラーメン一個だけ、何もつけない食パンだけ、というも珍しくはなかった。このようにして、食費を削って、本を買ったのである。文字通りのハングリー精神で<読書>したのである。欠損感が大きければ大きいほど、吸収欲も旺盛なのである。

しかし、容易く買えない書物もある。これは図書館を利用する他ない。大学の紀要類、藤でいえば「藤女子大学・藤女子短期大学 紀要」、「藤女子大学 国文学雑誌」がそれである。大学での専門的な学問には、このような雑誌の論文を読むことが不可欠である。幸いに、藤の図書館はかなり整備されていて、全国の大学の雑誌がほとんど集められている。単行本となっている研究書だけでなく、雑誌の論文を読むことを心がけてほしい。単行本を部分的に読む時、雑誌の論文を読む時には、大いに図書館を利用して下さい。



カット・中村友美(庶務課)

「いき」と Sprezzatura

平松哲司（英文学科・専任講師）

最近九鬼周造の「いきの構造」という本を読んだ。「息の構造」か「生の構造」かも分らず、どこかで多田道太郎がほめていたのを覚えていて、本屋でたまたま見かけたので買い込んでおいたのである。あけてみると小冊子ながら立派な美学哲学書で、最初はとっつきにくい、いったん癖のある文体に慣れてしまえば、作者の意外な「艶っぽさ」に新鮮な驚きを感じる。

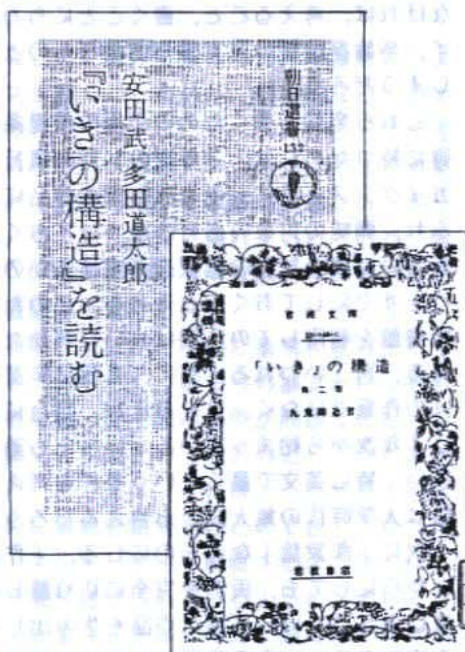
私の興味を一番ひいたのは「いきの自然的表現」という章である。それによると「いき」とは「姿勢を軽く崩すこと」であり、「うすものを身にまとう」ことであり、「あっさりした浴衣を無造作に着る」ことである。また「いき」は薄化粧を尊び、髪は略式のものを楽しむ。髪の微妙な崩し方、「結びそくれしおくれ髪」がもてはやされたのはそれが「いき」であったからである。

ここまで読んでくると、どうも「これなら日本でもなくてもあるぞ」という想いがむらむらと湧いてくる。イタリア・ルネサンスの社交界のバイブル、カスティリオーネの『宮廷人』のうたう Sprezzatura、「無造作の美」のことである。Sprezzaturaも女性のうなじにかかるほつれ毛、薄化粧、薄絹が女性の肢体にからみつく自然美をめてた、過度な人工美が「野暮」なら、無造作、無関心を装った媚態は「いき」である。その意味で17世紀のイギリスの詩人ベン・ジョンソンの“Still to be neat, still to be dressed”（「私の好きなのは素朴さが魅力的な表情、そして顔、しどけなく流れるドレス、さらさらの髪、こんな麗しい無関心のほうが厚化粧よりよっぽど私の心をときめかす」）は「いき」の英国版である。ジョンソンの弟子ロバート・ヘリックの“Upon Julia's Clothes”にいたっては、西欧に「いき」なしと断定した九鬼氏に

ちよっぴり再考の念をうながしたのではないかと邪推するのだが……。

ジュリアが絹をまどって歩く、
その時、ああその時、彼女のドレスは
何と水のようにさらさら流れることが、

次に、目を転じて、
自由奔放な絹の躍動を見る時、
ああ、なんとその躍きの私の心を魅了することか！



- *「いき」の構造 他二篇（岩波文庫）910.1 /Ku28
- *『「いき」の構造』を読む 安田武、多田道太郎 著（朝日選書）910.1/Ku28y

卒業論文作成のために

卒業論文 雑感

伊藤義生（英文学科・教授）

これまで担当した文学関係の卒業論文に関連して思いつくまゝに述べてみたい。

まずどうして卒論を選んだのか、という動機づけが学生自身今一つ明確でないように思われる。「ふと気がついてみると、どうやら自分は卒論なるものをやろうとしているらしい。」といった雰囲気は濃厚なのは気になるところである。その上、自分が選んだ作家や作品にしても「何故それなのか」という熱気があまり伝わってこない。たゞひたすら信奉・礼賛だけの思い入れも困りものだが、自分の対象に情熱も湧かなければ、考えること、書くことにも力が入らず、卒論提出後の充実感も希薄なものになってしまうだろう。

これら卒論を書くための必須の前提条件を明確に持つためには、3年次の11月末頃行われるガイダンスまでに、色々な作家の作品に数多くふれ、興味の対象のあたりをつけておくなり、あるいは総合試験の選択を考慮するか的心づもりをすでにしておくことである。このためにも図書館を利用しての乱読は大いに有効な方法である。再三いわれるように、卒論は卒業年次だけの作業ではなく、2・3年次、場合によっては1年次から始まっているといっても過言ではない。特に英文で書くという条件を考えると卒論は大学時代の集大成とも言えるだろう。

次に「作家論」なるものにしろ、「作品論」とやらにしても、両者を完全に切り離しての作業は考えにくい。作家は作品を生み出してこそ作家であるという至極明快な事実を無視して、たゞ作家の自伝的背景（例えそれが極めてドラマティックであったとしても）と作品名だけを並べるのはいかにも芸のない話である。作家が作品の中に還元されてはじめて「作家論」が成立するのではなかろうか。「作品論」の場合

でも、その作家があたかも一作品しか創作しなかったかのように、他の作品を全く黙殺してかえりみず、その作品の梗概や主題・構成・技巧を各々「御当地一口案内」風に紹介してみせてもやはり迫力には欠けるのである。自分の指摘した論点が他の作品（あるいは作家自身）とどう関連するのか、それは共通の要素なのか、はたまたその作品だけの特異な現象なのかという所までおし広げられなければ、えてして独善と牽強附会におちいりやすい。

学生は口々に自分のアイデアが先行論文・研究書等ですでに論じられているのでオリジナリティを出すのは難しいと言う。対象とする作家、作品が著名であればある程、参考文献数が多くなるのは当然である。同じ論点が何度も繰り返し論ぜられるのはそれだけ重要であるという証拠でもあるし、簡単には掘り尽せない鉱脈であるともいえる。卒論は自分の対象が従来誰によって、どの点で、どのように論じられて来たかを検証する作業でもある。文献数が多いことは自分の論を支える材料が豊富であると考えれば心強い味方にもなる。資料に論をつき従わせるのではなく、論を補強する助っ人と逆手に利用するのがよい。

では学生のオリジナリティはどのように発揮されるのかといえば、まず第一に対象を自分自身の感性というフィルターに通し、同じアイデアでも自分ならどう表現するかという点と、第二に卒論全体の進め方——構成にどのような工夫をこらすかということになるだろう。同じサラダでもドレッシングと盛りつけ方の妙でずい分新鮮味は出せるはずである。

卒論を仕上げていくことはモザイク画を製作していく過程と似ている。個々の色彩を持つ断片を有機的に配置して最終的に自分の意図を統

一された形で提示する。モザイク片たる個々の論をしっかりと固定するボンドの役割を果たすのは各方面からの引用である。しかしボンドの海に判然としない断片が漂っている作品が少なく

ないのは残念なことである。

最後に先生方を決して校正係とすることのないように願ってこの稿を終りたい。

卒論遁走曲¹

丸山隆司(国文学科・助教授)

文章を書くタイプには、ふたつあるようだ。つまり、厳密に構成(Plot)を立ててから書くタイプと、いきなり書きつつ考え、考えつつ書くというタイプだ²。

一見、前者(仮に、Aタイプとする)の方が合理的なように見えるが、じつはそうでもない。なぜなら、構成はあくまでも構成であり、文章そのものではない。各部分を書いてゆくうちに、構成は、だんだんプレッシャーとなってくる。つまり、構成どおり文章化することが難しいのだ。構成は、あえなく砂上の楼閣ということになる。

では、後者(仮に、Bタイプとする)はどうか。この方は、ノッテいるときはいいのだが、詰まってくると先が見えなくなり、書いていたモチーフがまがりくねり、脇道へ迷いこんで、とうとう行きどまり袋小路にはいつてしまう。あと戻りしようにも、どこまで戻ればいいのか途方にくれてしまう。つまり、迷^迷路^路に入り込んでしまう。導^導きの糸があればいいのだが、神話は現実ではない。

このふたつのタイプは、書けなくなる事情が異なるように思われるが、じつは、それは見かけの違いにすぎない。つまり、いずれも主題に向かって書く、ということには違いない。

Aタイプは、「序論・本論・結論」(あるいは「起承転結」)³といった構成に従って、「序論」で主題に輪郭を与え、それを論証する過程(「本論」)、そして「結論」へとということなのだ。とすれば、この構成は、あらかじめ主題を分析・分解し、それぞれ要素を各部分に配

分するのだが、それは、主題を中心とするツリー状、つまり系統樹なのだ。Bタイプのばあいだって、同じだ。この系統樹の末端からはじめるわけだが、主題へ向かう途中に、いくつかの分岐点が待ち受けている。そこで、左右の方向を間違えれば、また末端へと入ってしまう。だから、両者は入口が違っていても、その土台は同じだ。

こんなことを書いてしまうと、卒論というより、論文を書くこと自体が、絶望的なことのように思われてくる。ここで、<だから、よく考えて始めなさい>などというのは、たぶんお笑いなのだ。言う方だって事情は同じなのだから、むしろ、そうした操作に慣れているものが、慣れていないものに向かって教訓を垂れるのは、事情を隠蔽するだけだ。

ところで、なにがこうした事情を産み出しているのか。おそらく、ぼくらの論文というものへの幻想を産み出す思考の型が問題なのだ。つまり、論文の主題というもののとらえかたの問題なのだ。たとえば、それは、「自分がその研究のために情熱を燃やすことのでき」、かつ「自分のエネルギーを注ぐに値するような」⁴ものという条件付けられているようだ。そして、さらに「大事なことは、自分が選んだテーマが『流行』の波に乗っているかどうかではなく、そのテーマを選んだ自分の根拠をはっきりと自覚すること」だそうだ。まったく、憂鬱になってしまう。けっきょく、論文とは、主題をめぐる心情告白のようになってしまいそうだ。論文を書くことにとって第一の難関は、ここなので

はないか。

主題を選ぶのに「自分の根拠」などなくてもいい。主題は、目の前の、そこにあるのだ、というふうに発見すればいいのだ。そうすれば、もっと軽く、かつ論理的になれるはずだ。つまり、論文は、そのように発見される主題についての論証でいいのだ。それがどのように問題な

のか、問題である前提（土台）を明らかにすればいいのだ。比喩的にいえば、「4×4の正方形のなかで1から15の数字を並べ換えるゲーム」*5を成り立たせる「空いたマス」こそが、主題だ。

並べ方は一通りではない。

*1-遁走曲（伊：fuga）対位法の模倣の技法の上に組み立てられるポリフォニー最高の器楽形式。（『岩波小辞典 音楽』）

*2-榊島忠夫『文章工学—表現の科学—』は、三つのタイプをあげているが、二番目は、論理的には、このタイプを分ける条件の組み合わせからなっているようだ。

*3-藤女子大・短期大学図書館編『レポート・論文の書き方』（'88/Leaflet）

*4-斎藤孝『増補・学術論文の技法』（'77）。「技法」と名乗っていないながら、このフレ

ーズは、まるで、運動クラブの根性論のようになっているところが、なんともおかしい。この他にも、2・3冊（*3に、参考文献が載っている）目を通したけれど、ある本では、「自分の根拠」の代わりに「こころ」が求められていたりする、という驚きがあった。

*5-柄谷行人『思考のパラドックス』（'84）。この本は対談集。引用は「マルクス・貨幣・言語」というテーマの対談のなかで、浅田彰の発言。P233。

藤 禎子（国文学科・教授）『小説の中の女たち』 北海道新聞社 1989.5.31
北海道新聞 1988.1.9.～1989.1.28連載に加筆



時代を紡いだ52人のヒロイン—

女性はいづの時代にも、新しく、新しい生き方を求めた。「成る女」の聖子、「挽歌」の梅子……。名作52編にみるヒロインの隆起に満ちた愛のかたち。

北海道新聞社 定価 1,200円（税別）

女性問題を云々するのは、今、若い女性の間では「カッコワルイ」ことなのだそうである。しかし、「カッコヨク」だけで済まない人生を知る日がいつか来るだろう。そんな時、ここに出てくる女たちが、無縁なものとしてでなく、どこかで甦ってくることもあるだろう。

藤 禎子（著者あとがきより）

図書館実習を終えて

北井 和

(1988年度 短大国文科卒)

去年の12月から今年の1月にかけて、主に冬休み中に図書館で司書の実習をしました。この実習で特に感じたことは、私達がふだん利用している貸出カウンターの他にも、見えないところでとてもたくさんの業務から成り立っているということでした。図書カードを作るのももちろん、全集の目次や月報を製本したり、図書の移動、書架のそうじ、修理など、私達が実習したのはそれらのほんの一端にすぎなかったのですが数えあげるときがありません。そしてそれらのひとつひとつが、私達が少しでも利用しやすいように、ということで行われているのです。

このように内側の仕事を体験したことにより、実習が終わった後にも今までとは違った見方で図書館というものを考えることができるようになったと思います。

利用する上で、実習中に学んだ目録や参考図書の活用のしかたによって、利用の幅が広がりもっと早く知っていたら、と思うことがたくさんありました。自分で実習した新刊図書や、目次などに会おうととてもうれしく、またそれと同時に、一人でも多くの人に利用してほしいと思います。

図書館は私達が積極的に利用すればするほどたくさんのことを学ぶことができます。統計では、私達の図書館は全国的にも利用が多くなっています。それはこのような細かい仕事の積み重ねだということを実感しました。

☆北井さんは、現在、旭川藤高校の図書室に勤務されています。

田仲ひとみ

(1988年度 短大国文科卒)

私は冬休みに図書館で、司書の資格を取得するための実習をさせていただきました。

実習は総務・整理・閲覧という三つの係で行いました。

普段、私達利用者が直接触れる機会があるのは閲覧係——貸出返却・参考業務といった、館内のカウンター業務がほとんどですが、その他に余り利用者の目に触れることのないような仕事、こんな仕事までするのか、と思わず驚いてしまうような仕事、山のようにたくさんあるということを知りました。

図書館の仕事というと、静かで楽そう、という印象を持ちがちですが、実際に仕事してみると、とにかく“肉体労働”です。広い館内中を歩き回ったり、超広辞苑級の重い本を抱えて校内中(時には外にまで!?)歩き回ったり、なのです。

また、逆に精神力が勝負、というような根気と頭脳プレイがものを言う仕事もあったり、と本当に多種多様な業務がありました。

このように表面的な仕事はもちろん、その他で利用者の目に触れないところでの地道な仕事によって、現在のように利用者がとても利用しやすい図書館があり、そしてこれからも今以上に、より利用しやすい図書館になっていくようにと考えて、館員の方々は仕事をされているのだと強く感じることができました。



カット・田仲ひとみ

藤に咲く花 13

ハクサンシャクナゲ

Rhododendron brachycarpum D. Don

購買部向いの窓から中庭をのぞくと、ハクサンシャクナゲ（北海道ではエゾシャクナゲと呼ばれる）の木が目に入る。晩春から初夏にかけて、うす紅色の花が、放射状に広げた葉の上に、寄り合うように咲いている。常緑広葉樹であるが、冬になると葉を下げ、すぼめるように内側に丸めるそうである。身を縮めて、じつと寒さに耐えるのであろう。



原産地はヒマラヤや中国などの高地で、分布範囲はさらに広く、種類も非常に多い。自然の群落は高い山の中でなければ見ることはできないが、人知れぬ深い山の中、伸びやかに葉を広げ、悠然と花開くシャクナゲはこの世のものとは思えぬほど美しく、神秘的であるという。かつて、四国のある地方では、シャクナゲを神霊の宿る木と考えたようで、その小枝を玄関にかけて家内安全を願い、田のあぜにさして豊作を祈ったという。葉は煎じて熱さましに用いているところもあるし、漢方では、強壯、鎮痛の目的で応用されている。花ことばは威厳・荘重。

参考資料 『講談社園芸大百科事典』 講談社 1986 620/Ko78

『植物文化史』 白井英治著 裳華房 1988 470.4/U95

写真は「北海道の樹木」 鮫島惇一郎著 北海道新聞社 1986 より転載

◎卒業生からの寄贈

文学部国文学科1988年度卒業の皆さんから下記の資料が寄贈されましたのでご披露いたします。

竹山道雄著作集 全8巻 福武書店
前田愛著作集 全6巻 筑摩書房（刊行中）

ありがとうございました。

◎夏季休暇中の日程

夏季休暇中の開館・閉館は下記のとおりです。詳しくは掲示板をご覧ください。

<開館> 7月31日(月)～8月5日(土)
8月21日(月)～9月2日(土)
9月11日(月)～9月14日(木)
開館時間 月～金 9:30～16:00
土 9:30～14:00
<休館> 8月7日(月)～8月19日(土)
9月4日(月)～9月9日(土)

藤女子大学 図書館 だより 第35号 1989. 7. 10

発行者 札幌市北区北16条西2丁目 藤女子大学図書館
TEL 011-736-0311(代) FAX 011-709-8541(大学庶務課)